

# リスク評価のリアル – 専門調査会座長に聞く –

## 合意が得られるまで議論を尽くす

食品健康影響評価（リスク評価）は、様々な専門家で組織する専門調査会で議論された後、食品安全委員会で決定され、評価書としてまとまります。今回は、一般の方にはあまり知られていない専門調査会の様子を、山本茂貴委員長と農薬第一専門調査会及び農薬第四専門調査会の小野敦座長に語っていただきました。

【インタビュアー：松永和紀委員】

**専門調査会では、どのように議論しているのでしょうか。**

**小野座長** 農薬の場合、現在5つの専門調査会があり、調査会ごとに各分野の専門家で審議を行っています。私は一般毒性が専門ですが、病理や生殖発生毒性、遺伝毒性、植物代謝、動物代謝、近年では疫学の専門家にも入っていただいています。

**松永委員** 段ボール何箱分にもなるような膨大なデータを細かく見ていただいていると聞いています。

**小野座長** そうですね。今は段ボールではなくてDVDになりましたが、確かに資料は多いです。でも、私も含めて専門委員は、すべてのデータを見た上で評価しています。大変ですが、専門家はそれぞれバックグラウンドがあり、普段からデータを見慣れていて、見るべきポイントも分かっているので、一般の人が思うほどではないかもしれません。

議論の過程で、違う分野の専門家の考え方を知って評価をすることは、専門家にとっては楽しいというか、学ぶところがあります。私は一般毒性を見ているのですが、例えば代謝試験について専門家から解説を聞いて毒性の出方を改めて見ると、自分の評価にプラスになるところがあります。だから、いろいろな分野の専門家がいて評価が成り立っているんだと思います。

**松永委員** 多様な専門家の議論を座長としてまとめあげるのは大変でしょう。

**小野座長** そうですね。ただ、議論が集約しない場合でも、専門委員には自身の考えをしっかりと発言して十分に議論してもらいます。データが足りないという意見が



おの あつし  
**小野 敦**

国立衛生試験所（現国立医薬品食品衛生研究所）、厚生労働省医薬食品局、医薬基盤研究所などの勤務を経て、現職は岡山大学学術研究院・医歯薬学域・薬学系教授。薬学博士。2012年（平成24年）から食品安全委員会農薬専門調査会の専門委員、2021年（令和3年）から農薬第一専門調査会座長、農薬第四専門調査会座長を務める。

出た場合には、評価を諮問したリスク管理機関に追加のデータを要求することもあります。事務局の方には申し訳ないですが、議論が集約しない場合は、次回に持ち越しても仕方ないと思ってやっています。一方で、評価結果を待っている人たちもいるので、なるべく早く評価結果を出すことも必要です。

**山本委員長** 専門調査会で評価書案がまとめられた後に、食品安全委員会でも7人の委員が議論します。7人はそれぞれ担当分野があり、担当の調査会に出席します。たとえば、農薬の担当は浅野哲委員で、浅野委員は、専門調査会に出席して議論の流れを把握しており、ほかの委員に評価書の概要を説明し質疑が行われます。国民の意見・情報を募集する「パブリックコメント」も、新しい農薬成分について評価書をまとめた時や、以前の評価を再検討して内容が大きく変わった場合などに実施し、最終的な評価がまとまります。

評価書は、委員会としての考えや科学的な根拠を示す